

福祉教育への挑戦(9)

先生の想いに触れて

高井裕二

私が非常勤先として勤務している専修学校では、常勤と非常勤の先生方で教科「福祉」を教えています。大学でも勤務している私の場合は、高等専修学校から自分が勤める大学に進学してくる生徒(学生)にも関わることができ、7年間の付き合いになることもあります。高等専修学校での福祉の学びについて、大学に進学したある生徒の言葉が印象に残っています。

「あの時は、ただただ面倒にしか思わなかったけど、A先生の授業がどれだけ専門的だったのか・・・卒業してから気づいた。やっぱあの先生は凄いよ」

私の授業はどうだったのかと思わず訪ねたくなるようなセリフですが、A先生というのは長年、その高等専修学校に勤務している先生で介護職の実務経験もある方です。何度かアシスタント的に授業に入らせてもらったこともありますが、ベッドメイキングはもちろん、移乗・移動や体位変換などについて、しっかりと根拠を述べながら、わかりやすく伝えることができるので、「私には何年経ってもできそうにない」と思えるくらい介護系の知識の差を感じます。

生徒からA先生の素敵なコメントをいただいたので、A先生にもそのことを伝えてみました。すると、A先生は「卒業してからでも、そういう風に気づいてくれるのは、とても嬉しいこと。自分だって常に介護講習などに参加して、常に最新の介護技術を伝えようと頑張ってますから」と話されました。

そのような熱意が生徒にも伝わっているのでしょう。A先生はどの学年でも生徒たちから尊敬されています。この連載でもずっと抱えている「介護という領域での現場経験のない自分が授業をするということについて、どう考えているのか」を訪ねてみました。私という本人がいる前で本音は言いにくいとは思いますが、私の背中を押してくれるようなお返事でした。

「高井先生、現場の職員が来て、この学校の生徒にいきなり教えられると思いますか？無理でしょう。生徒の特性を全く掴めないまま、現場のことを語る先生はいませんが、みんな上手いはずなのに辞めていきました。ただ『伝える、教える』だけはダメで、うちの生徒たちと関係を築けるか、ですよね。学校の授業という中で、試験問題も作成して評価もしないといけない。教員不足とはいえ、介護職の知り合いはいても、この学校の教員になれるとは思えないので、紹介しにくいんですよ」

私の意識も入っていますが、概ねこのような内容をお話いただきました。短い言葉の中でも論点がいくつかありますね。この高等専修学校の生徒について理解すること、理解しようとする。様々なニーズを持っている生徒たちに専門的な知識や技術を伝えるには、「何か」が必要である。そして、自分のやっていることを感覚ではなく、生徒に伝えることができる伝達力。そして教員として生徒の能力を伸ばし、どこまで到達することができるかを評価するための視点。科目ごとの性質はあるものの、生徒とは一定の関係は築くことができているし、「自分の欠けているところを別で補えるかも」という今まで考えたことがない、自分の強みを活かすことができれば、それなりの教育効果をもたらすことができるのではないかと考えられるようにありました。

もちろん、欠けているところを正当化することではありませんので、絶えず努力をしていきますが、いわゆる「現場」経験がないことに悩まれている方は、他の先生方からどう映っているか、そして自分の魅力や強みとは何かを考えると良いかもしれません。